

船員労働安全衛生規則の解釈について

毒性を有する貨物を運送するケミカルタンカーの安全対策の徹底については、平成25年10月1日付け「ケミカルタンカーの運航における安全対策の徹底について」により全国内航タンカー海運組合から周知・徹底していただいているところですが、安全対策の一層の徹底を図るため、船員労働安全衛生規則（昭和39年運輸省令第53号。以下「労安則」という。）における安全基準等に関する規定の解釈について、下記のとおり、周知するので、貴会におかれても、あらためて安全意識の向上及び安全対策の確認に取り組むようお願いします。

記

1. 労安則第28条第1項第12号、第44条第2項、第49条、第50条、第75条第2項及び第76条の「人体に有害な気体」とは、当該気体を発散するおそれのある物質が油、液体化学薬品等の如何にかかわらず、SDS（Safety Data Sheets:安全データシート）にTLV（Threshold Limit Values：暴露限界値）が記載されている気体をいう。
※ SDSとは、「特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律」（平成11年7月13日法律第86号）第14条の規定に基づき提供される情報が記録されたもの又はこれと同様な情報が記録されたものをいう。
2. 労安則第44条第2項の規定の趣旨は、他の法令の規定に基づき船舶に備えてある検知器具が、下記3.の規定を満たす場合、これを同項の規定に基づき備えた検知器具とみなし、別途検知器具を備えることを必要としないとするものである。
3. 労安則第44条第2項の「当該気体の量を計るために必要な検知器具」とは、当該気体を発散するおそれのある物質が油、液体化学薬品等の如何にかかわらず、当該気体の濃度が当該物質のSDSに記載されたTLVのうち最も低い濃度以下であることを計ることのできる検知器具をいう。なお、当該検知装置を確認する場合、当該検知装置の取扱説明書等により、当該検知装置で計ることのできる気体の種類、濃度等を確認されたい。
4. 労安則第50条の規定に基づき、人体に有害な気体の量について検知を行った場合であって、「人体に危害を及ぼすと認められた場合」とは、当該気体を発散した物質が油、液体化学薬品等の如何にかかわらず、当該気体の濃度が当該物質のSDSに記載されたTLVのうち最も低い濃度以上であると認められた場合をいう。
5. 労安則第44条第2項に定める、人体に有害な気体の量を計るために必要な検知器具につき、現時点において技術的制約等からこのような検知器具を備えることが

困難な場合であって、人体に有害な気体が発散するおそれのある場所で作業を行う場合には、作業を開始する前に十分な換気を行うとともに、労安則第50条第2号から第5号までの規定を厳格に実施することで安全を確保することとされたい。

6. なお、5. の場合においても、船舶所有者は、労安則第50条第1号に規定される酸素の量を検知しなければならない、船員の労働安全を確保することを要することに留意されたい。